# 癒えない津波の傷

## スリランカを訪ねて

手と手 岡山発 国際貢献

**破壊** 津波の直撃を受けて壊れた民家の多くが、がれきの撤去をされないままに放置されている＝カルタラ

**災禍の地** 津波は医療機関をまひさせた。1日で72体の遺体を受け入れ、霊安室がパンク状態になった病院＝カルタラ

朝刊一面に連載中の「手と手 岡山発 国際貢献」の取材で一月末から二月にかけ、二〇〇四年末のスマトラ沖地震による津波で三万人を超える犠牲者を出したスリランカに入った。

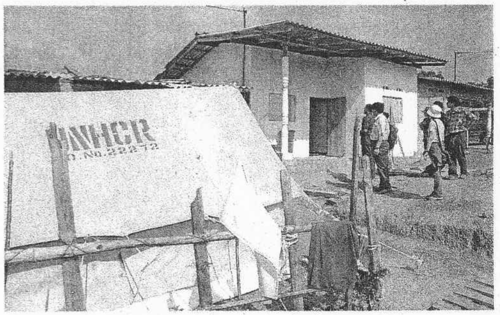
足を踏み入れた西部海岸地域は「黄金海岸」の別名を持つ。百数十キロ続く砂浜、ヤシの木、群青の海。絶景を眺める限り、災害がうそのように思えた。

最も被害を受けたのは海沿いのリゾートホテルと漁師たちだった。資金力のあるホテルはすぐに営業を再開していた。一方、貧しい漁師の多くは今も仮設・復興住宅暮らしを余儀なくされている。電気はあっても水は給水タンク頼り、運が悪ければいまだテント住まい―など、家を再建する金が無いばかりに衛生面の不安や不便を抱える。

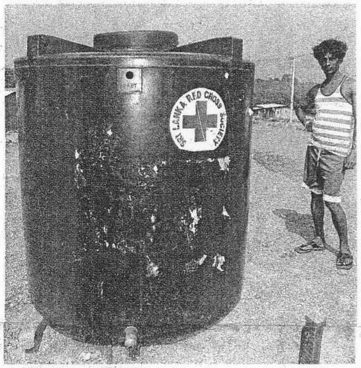
スリランカ政府は〇二年の停戦合意まで、反政府組織「タミル・イーラム解放の虎」と長年内戦を続けていた。その割には整った行政組織を持ち、保健医療体制を整備してきたものの、貧しい者ほど災害で苦しめられる現状があった。

日本人にとってスリランカはなじみの薄い国かもしれないが、スリランカは知られざる親日国だ。

日本は一九八六年以降最大の対スリランカ援助供与国であり、スリランカは第二次大戦後のサンフランシスコ講和会議でいち早く対日賠償請求を放棄した。実は深い縁で結ばれている。スリランカの現状を写真で紹介する。（藤岡慎吾）

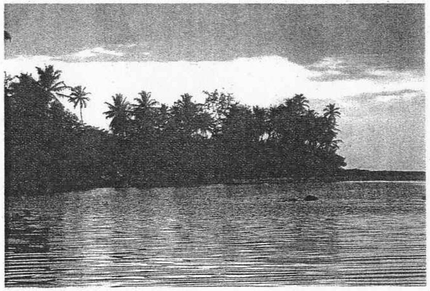



**不運は続く** 台風で復興住宅のスレート屋根が割れたために張られたテント。1カ月以上も修理されないまま＝カルタラ




**生命線** スリランカ赤十字が用意した復興住宅の給水タンク。いつまで給水が続くのか、被災者は不安がる＝カルタラ

**本来の姿** 海沿いから数キロ内陸に入ると、津波の影響を免れ、平穏な暮らしがある。シナモンの皮をはぐ農家の女性＝ベントタ



**雄大** スリランカの浜辺の夕景。自然を眺めれば、津波被害など無かったかのようだ＝カルタラ

**発展** 内戦中は爆弾テロなどが相次いだ最大の都市コロンボ。津波後の世界各国の支援も追い風ににぎわいを増している